

第7章 対青葉再試合決定

苦しみながらも勝ち進んだ地区予選での決勝戦で11対10で青葉学院に敗れ、準優勝におわった墨谷二中だったが、気持ちをきりかえて谷口は最後のつとめである来年のチームづくりを考えていた。

7・1 新聞部のインタビュー

谷口が野球部部室にむかって歩いていく…下級生が谷口を見つけてなにやら話をしている…

男生徒A 「お、おい、さいきんいやにかんろくがついてきたみたいじゃなか。」

男生徒B 「まったくなあ…」

女生徒A 「ちよつと谷口さんよ。」

女生徒B 「すてきーっ。」

みんなの視線をあびてちよつとてれくさそうに歩いていく谷口であったがそこに新聞部の生徒がやってきた。

新聞部女 「新聞部のものですがインタビューさせていだきたいんですけど…」

谷口 「は、はあ…ど、どうぞ。」

新聞部女 「地区予選でのご健闘ほんとうにおめでとうございました。」

谷口 「は、はあ、どうも…」

新聞部女 「本校で地区予選決勝大会に進出したのは野球部がはじめてとみんなおおさわぎなんですけれど…」

谷口 「は、はあ…」

新聞部女 「どうやってそんなに強くなったのかしらたいんですが…」

谷口 「た、ただ、みんなとがんばっただけです。」

新聞部女 「なるほど…、ここまでナインをひっぱってきたリーダーとしての苦心談をおきかせください。」

谷口 「く、苦心談なんて…みんなががんばってくれたからですよ!」

新聞部女 「ずいぶんひかえめですね、あなたにとって野球とはなんですか？」

谷口 「えーと、ぼくにとって野球とは…なんですか…ですね。」

新聞部女 「たとえば野球をとおしてまなんだこととか…」

谷口 「がんばる…ってことかな。」

新聞部女 「がんばるがんばるですね。ちよつと記事になりにくいなあ…これからの目標は…?」

谷口 「目標ね…、えーと…、うーんと…」

新聞部女 「やっぱり、がんばるっていうこと…ですか。」

谷口 「そうです…」

新聞部女 「あ、ありがとうございます!」

谷口 「い、いいえ。」

谷口がさったあとインタビュー担当の女子生徒と写真担当の男子生徒が話をしている…

新聞部女 「がんばる、がんばる、がんばるか…、まるでモーレッツキャプテンね。」

新聞部男 「モーレッツキャプテンおおいにがんばるってタイトルどうだ!」

新聞部女「あ、それいい！」
新聞部男「あはは！」
新聞部女「これじゃ記事にならないわ…」
新聞部男「まったく…」

7・2 選抜大会出場決定！

谷口が野球部の部室にはいつてきた、みんなはもうすでにきがえをはじめている…丸井、島田、高木がなにやら新聞をのぞきこんでいる…

谷口「やあ、みんなはやいな。」
島田「やあ、キャプテン！」
丸井「青葉が順当に勝ちすすんでいますね。」
谷口「まず青葉の四年連続優勝はかたいだろうな。」
丸井「そうですね！しかし青葉とやった地区予選決勝はおしかったなあ…」
島田「全国大会に出場できる選手の数人が14人までって規則がありゃあなあ…」
丸井「そうすりやおれたちが勝ってたかもしれないぜ！」
島田「まったく…」
丸井「なあ、もしおれたちが勝ってたらどのへんまでいけたとおもう？」
島田「いい線いってたかもな！なにせ青葉の一軍と戦ってあれだけの試合ができたんだからな。」
高木「そうよ！」
谷口「いまさらすんだことをいうな、こんど勝てばいいじゃないか！」
高木「それもそうだな！」
丸井「ようし、こんどあったときはメッタメッタのクツチャンクツチャンにしてやろうぜ！」
谷口「そうとも、そのいきだ！」
イガラシ「しかしそれにしちや、うちは選手の層がうすいんじゃないですかねえ。」
谷口「たしかにそうだ、いまのままでは全国大会には通用しない。しかしこのところ一年生にだってかなり実力がついてきてるじゃないか。この調子でいけばレギュラーとしてつかえるものがどんどんでてくるぞ！」
イガラシ「それもそうですね！」
丸井「おれたちもがんばらなくっちゃ一年生にポジションとられちゃうぞ！」
イガラシ「丸井さんの例もありますしね。」
丸井「ひとことよけいだ！」
部員「あはは…」

そのとき部室のドアがあきケガをした松下がはいってきた。右手はまだ三角巾でつつたままである。

谷口「や、やあ、松下…いいのか医者にとめられているんだろう。」
松下「ええ、でもここにこないとおちつかなくて…」
谷口「そうだろうな…、どうだブレイはできないだろうが後輩のめんどろをみてくれんか？」
松下「そのつもりでしたんです！」
谷口「そうか、じゃあ一年生がひとりでもおおくレギュラーになれるようにたのむよ。」
松下「まかしといってください。」

部員がグラウンドにて練習を開始した。グラウンド五周をまわったとき校舎から先生方がとびだしてきた…

校長「谷口くん！」
丸井「校長先生だ…」
校長「いいか、心をおちつけてようくきくんだ！」
谷口「は、はあ…」

校長「次期選抜全国大会にきみたちがえらばれたんだよ！」
 谷口「え…」
 校長「ほんらいならば青葉学院だけなんだが、地区予選の実績をかわれてこの地区からは特別二校出場ということになったんだよ。」

谷口をはじめ部員全員あぜんとして校長先生の話をきいていた。

校長「き、きみたちがこの地区の代表として全国中学大会に出場するんだよ！」
 丸井「キャ、キャブテン！」
 校長「いますぐって話じゃないけど、だいじょうぶなのかね調子のほうは？」
 谷口「一年生も実力がついてきていることだしなんとかやってみせます！」
 校長「そうかよかった、よかった、地区代表としてはじないチームにならずにかな。」

さつきインタビューした新聞部の生徒もこのさわぎをききつけてやってきた。

新聞部男「やっと記事になりそうだな。」
 新聞部女「とんでもない、大特集ものよ！」

新聞部はさっそく谷口にふたたびインタビューをするが：

新聞部女「谷口さん次期選抜にえらばれたご感想を！」
 谷口「がんばります！」
 新聞部女「……」

谷口はすぐに部員をあつめた。

谷口「みんな、わかつとるだろうが全国大会選抜にでてくるのはつわものばかりだ。それに選抜にでてくるだけの学校はすでにその準備をすすめている…われわれはそれらの学校に勝つための練習をしなくてはならない。いいか、きょうから特訓にはいる！」

7・3 新聞取材

墨谷二中がはじめて来年の選抜大会出場校に選ばれたことで新聞社から取材にきた。

新聞記者「ずいぶんせまいところでやってるんだな。」

新聞記者「毎朝新聞の者だけど、春の選抜のことをききたいんだが…」

谷口「は、はあ…」
 新聞記者「きみたち三年生は卒業しちゃうんだろ、戦力のほうはだいじょうぶなのかね？」

谷口「はい、みんながんばってますので。」

新聞記者「ところで、えらばれた理由は地区予選で青葉学院に善戦したからだってね。」
 谷口「はい。」

新聞記者「まあ、全国大会四年連続優勝校青葉があいてじゃとうぜんだろう。そのときのスコアをおしえてくれない？」

谷口「11対10です。」

谷口からスコアをきいた新聞記者はややおどろいた表情をみせた…

新聞記者「ふーん、11対10ね。青葉は地区予選では二軍しかつかわないというが…それにしてもたいしたもんだ！」
 丸井「そんなことないスよ。途中から一軍がでてきたんスからね。しかもあげくのはてに全員一軍にかえちゃってさ、14人いじょうつかいがってきつたねえったらありゃあしねえ。な。」
 新聞記者「青葉が14人いじょう…？」

丸井が谷口と新聞記者のあいだにはいつて青葉戦のことを話すが新聞記者はとりあってくれない…

新聞記者「と、ところで現在のチームの調子はどうなの…」

丸井「あれ信用してないんだな。だれかスコアブックもってこいっ!」

谷口「いいじゃないかすんだことは!」

丸井「だって…」

新聞記者「い、いや、ぜひ、みせてもらいたい!」

一年生「どうぞ…」

スコアブックを一年生が持ってきて新聞記者にわたした…

丸井「どうです。」

新聞記者「で、抗議はしなかったのかね?」

谷口「もちろんしました。しかし規則書にのってないからってみとめられなかったんです。」

新聞記者「ちょ、ちょっと、これかりてくよ!」

丸井「どうしたっていうんだ、いったい?」

谷口「さあ、そんなことより練習、練習!」

シートノックの練習をはじめがしばらくするとさっきの新聞記者が谷口のもとに走ってくる…

新聞記者「はあ、はあ、き、きみ…、ちょっときてくれ!」

谷口「はあ…?」

新聞記者「ワケはあとで話す。」

谷口「みんな練習をつづけてくれ!」

7・4 全国中学野球連盟

谷口はわけがわからず新聞社の車に乗せられた。車から降りるとそこは全国中学野球連盟というかんばんがかかれた建物があった。

新聞記者「さあ、こっち、こっち。」

新聞記者「さきほど電話でお話した墨谷二中のキャプテンをつれてきました。」

大田原「全国中学野球連盟委員長をつとめている大田原です。」

谷口「ぼ、ぼく谷口です。」

大田原「ま、かけなさい。」

大田原「ちょっと、そのスコアブックみせてくれんか。」

谷口からスコアブックをうけると連盟委員長の大田原は墨谷対青葉戦のスコアに目をとおした。

大田原「ちょっとまってくれ、いま青葉の部長がくる。」

ちょうどそのとき、ドアをノックする音がした。

大田原「はいりたまえ!」

ドアが開くとそこには青葉部長が立っていた。谷口と目があうとややおどろいた顔をした。

大田原「なぜよばれたかわかっとなるだろう？」
青葉部長「はい、電話でうかがいましたので。」

大田原「なぜ14人いじょうつかったのかね？」

青葉部長「それは規則書に人数の制限をしるしてありませんでしたので。」

大田原「きみはわれわれの大会が全国高校野球にそった条件でおこなわれているのをしっとなるはずだ。」

青葉部長「は、はあ……」

大田原「だったら常識として規則書にうたわなかったことぐらいわかるとおもうが。」
青葉部長「……」

大田原「学生野球にかぎらずアマチエアスポーツというものは、おなじ条件のもとできそいあうのが本来の姿なんだが……。ちかごろのなにがなんでも勝ちさえすればいいという風潮には、わしゃうんざりしとるんだよ。」

青葉部長「じゃあ、どうすればいいんですか？」

大田原「問題はそこだが……」

青葉部長「優勝旗をおかえしすればすむことだとおもいますが！」

大田原「ほほーっ、まるできみの手で勝ちとったかのようだな。きみの気持ちはそれですむかもしれないが、きみにしたがって血と汗で勝ちとった生徒の気持ちはどうなるのかね？ わたしはどうもそのことが気になってな……」

大田原は席を立ちあがって外の景色を見ながら考えこんでいる。
突然に大田原が口をひらいた……

大田原「おなじ条件のもとで墨谷二中と再試合をしないさ。」

うつむいていた谷口が顔をあげた。

大田原「全国大会がすんだばかりだし、すぐにともしかんだろうから30日後でどうかな。」

大田原の一言で青葉学院対墨谷二中の再試合が決まった。

新聞記者「部長、再試合についての意見をきかせてください。」

青葉部長「このさい、白黒をはっきりさせてやる。」

新聞記者「墨谷二中についてひとこと！」

青葉部長「強い……、たしかに強い。」

7・5 野球部の部室の中で

谷口が部員にきょうのことを話をしている。誰もがおどろいた顔をしている……

丸井「ほ、ほんとですか？」

谷口「30日後だ！」

丸井「ようし、谷口さんら三年生がいることだしメッタンメッタンのクッチャン

クッチャンにしてやろうぜ。」

島田「おうよ。」

次の日の練習では引退まじかだった三年生をふくめて、新たな目標に向かって練習する墨谷ナインの姿があった。その中で一人、一年生でピッチャーをつとめるイガラシはややおもしろい気持ちで練習していた。

7・6 練習後、学校からの帰り道で

谷口「イガラシどうしたんだ、今日は元気がなかったじゃないか。」

イガラシ「ば、ばく青葉学院をあいにて九回も投げるとおもうと……ちよっと、たしかに地区予選では一回をおさえましたけど……正直いつてあれだけの打線じゃ三、四回が精いっぱいですよ。」

地区予選では三年生の松下が八回まで投げていたが、相手の打球を肩にうけケガをしてしまった。イガラシは九回の一回を投げただけだった。

谷口「それもそうだな。しかしバックがしっかりしてきていることだし、打たせていけばいいじゃないか!」

島田「そうだよ、おれたちにまかせとけってんだ。」

加藤「弱ねをはくなんてイガラシらしくないぞ!」

イガラシ「すみません。」

谷口「じゃあな。」

丸井「さいならー。」

島田「またな。」

7・7 練習前の野球部部室で

写真部「われわれ写真部の者ですが、校長にたのまれてこれを…」

丸井「なんスかそれ?」

写真部「青葉の特訓のようすをビデオにとってきたんです。」

谷口「青葉の特訓! それはありがたい、さっそくみせてもらいたいな。」

そこには青葉学院の卒業生までもが参加しての猛特訓の練習があった。ピッチャーをイガラシにみたてての練習、部長みずからがノックをしての守備練習、相手のエースの変化球練習……墨谷中部員はそれを見ておどろき、圧倒されてしまった。

谷口「どうもありがとう。」

写真部「い、いえ、どういたしまして。」

谷口「さあ、みんなどうしたんだ、練習だ! 練習!」

部員「……」

谷口「くよくよしたってはいまらないぞ、青葉に負けないように練習すればいいじゃないか!」

部員「は、はい。」

青葉のビデオの練習があまりにもすごかったので、練習していてもみんな元気がない。ピッチャーのイガラシは投球練習をしているが、気持ちばかりがあせて球にいきおいがない。守備練習のノック役を丸井に変わってもらい谷口がイガラシの投球練習のようすを見に行った。

谷口「イガラシ、もっと肩の力をぬいてみる。」

イガラシ「こうですか?」

谷口「だいぶよくなったぞ、でもまだまだ肩に力がいっているぞ。」

イガラシ「はい。」

谷口「そうだイガラシちよつとみてくれないか。おまえが三、四回しか投げられないっていうから、あれからちよつと練習してみたんだ。」

谷口の投げたボールはやや山なりのボールだった。球にはあまりスピードがなくキャッチャーもあきれた顔をしてボールを投げかえた。イガラシもすこしとまどいを感じていた。

谷口「どうだ、どこがわるいかなあ。」

イガラシ「も、もう一度、投げてもらえませんか?」

谷口「どうだ?」

イガラシ「もっとバックスイングで腕をおおきくのばして投げたほうが、いいんじゃないですか?」

谷口「こうか?」

イガラシ「いいんじゃないんですか。」

谷口「なるほど、バックスイングねエ…」



腕をのばして、おおきくふる。谷口はイガラシが言ったことをつぶやきながら投球練習をした。腕をのばして、おおきくふる。谷口はイガラシがアンダーシャツをきがえに部屋にいったあとにも投球練習をつづけた。腕をのばして、おおきくふる。

イガラシ「まったく、あんな投球で青葉につうようすると思っているのかな、なんにもわかっていないんだから。」

イガラシは一人部屋の中でつぶやいた。

7・8 谷口の家で

腕をのばして、おおきくふる。自分の部屋で投球練習をしている谷口の姿があった。足をおろすたびにたたみがミシ、ミシと音をたてている。

母「またはじめたよ。」
父「キャプテンとしてなんとかしようってのはわかるが、二週間たらずじゃなあ……」

そのあいだにもミシ、ミシと音が聞こえてくる。

谷口「ちょっと神社にいつてくるね。」

神社ではかべにむかって投球練習をする谷口の姿があった。

腕をのばして、おおきくふる。

だんだんわかってきたぞ！

腕をのばして、おおきくふる。

そうだこんなかんじだ！

腕をのばして、おおきくふる。

谷口はすこしのひまもおしんでピッチングの練習にはげんだ。

7・9 グランドが見える教室で

グラウンドには雨の中、一人マウンドからバックネットに向かってボールを投げる谷口の姿があった。グラウンドが見える教室ではそのようすを見ながら食事をおえた生徒が雑談している…

生徒A「みろよ、この雨の中！」

生徒B「よくやるよ。」

生徒C「しかしナインの間じゃ、とても青葉には通用しないって話だぜ。だけど谷口にとって最後の試合だからいうにいえんらしい…」



7・10 試合まであと一週間とせまった練習中

練習中にこの前の新聞記者がたずねてきた。もちろんこんどの地区優勝をかけた試合の取材にきたのであった。

新聞記者「どうかね調子は？」

丸井「まあまあです。」

新聞記者「あそこで投げているのはキャプテンの谷口くんじゃないのかね？ ピッチャーもやるのかね？」

丸井「と、と、と、とんでもない、た、ただのあそびですよ！」

新聞記者「よゆうがあるんだなあ、試合まであと一週間だっていうのに、そんな状態じゃないはずだが……」

丸井「……」

7・11 練習が終わったあと部室の前で

谷口が投球板に向かって投げ続ける音が聞こえている。「コーン……」「コーン……」

島田「まったくいつまでつつける気なんだ……」

イガラシ「よしなさいよ。」

島田「そ、そりや、キャプテンの努力はかうよ、しかしやってやれないことと、やれることがあることをしるべきだよ。」

加藤「まったくだ、試合まで一週間しかないってのによ！」

丸井「イガラシは陰でコソコソいうなっっていったんだ！」

加藤「そういうおまえだっって新聞記者にきかれてこまっていたじゃないか。」

丸井「そりや、そりやよおれだっってこのドタン場にてきさ、キャプテンのやっっていることはうなずけないさ。でもよ学校中のわらい者にされてさそのうえおれたちナインが陰でコソコソいやみをいってよ、キャプテンがかわいそうで……」

部員が話をしている間も谷口の投げ続ける音が聞こえてくる。「コーン……」「コーン……」

丸井「イガラシ！ キャプテンにあきらめるようにいってこいよ！ おまえピッチャーなんだし、だいいちおまえが最初にはつきりいつときゃこんなことにならなかったんだ。それに……」

イガラシは丸井をずっと見ている。

丸井「な、なんだよ。」

イガラシ「おれにはいえませんよ。」

丸井「な、なんでだよ。」

イガラシ「だいたいおれがそんなことをいえるがらかい、三、四回しか投げられないなんて弱ねをはきやがってよ、おまけに青葉の特訓のビデオをみたぐらいでオタオタしやがって、ところがどうだいキャプテンは、やるのがなんであらうとあきらめやしない！ 最後まですてやしないじゃないか！」

部員「……」

イガラシ「最後まであきらめないああいいう態度はだいいじなんじゃないですか。」

部員「……」

丸井「みならわなくっちゃな……」

さらに墨谷の猛特訓はつづいた。すこしの時間もおしんで練習にはげんだ。谷口一人だけの昼休みの練習にも、部員全員が参加していた。ナインのひとりひとりがあきらめまい、試合をすてまいという態度にかわっていた。

松下「だけど谷口さんてふしぎな人だ……たとえやるのがなんであらうと、またみんなをひっぱりあげてしまった。ふしぎな人だ……」

ケガをしてこんどの試合には出場することのできない松下が練習のようすをみてつぶやいた。谷口はあいかわらずひまさえあればボールをほうっていた。

「コーン！」

谷口「だいぶおもったところへ投げられるようになったぞ。しかしこれじゃまだ打たせてとるタマだ！」

「コーン！」

イガラシが谷口の投球練習をしているそばにやってきた。

「コーン！」

何かにおどろいたようすである…

「コーン！」

そんなイガラシに丸井がきがついた。

丸井「どうしたんだよ、イガラシ？」

「コーン！」

イガラシは谷口の投げるタマにおどろいたのである。谷口が投球板に投げたタマが谷口のあしもとにまではねかえってくるのであった。

イガラシ「どうやらセットポジションもおぼえてもらったほうがよさそうだな。」

「コーン！」

部員全員谷口のもとにあつまってきた。だれもが谷口の投げるボールにおどろいた…そして決勝戦の再試合の日がやってきた。